

巻頭言



コウノトリが 羽ばたく国

農林水産政策研究所 所長

西尾 健

このところ、農業の多面的機能との関係で、生物多様性について関心を持っている。私は大阪南部の農村地帯に生まれた。生家は集落のはずれに有り、周囲は水田であった。田植え後はうるさいほどのカエルの大合唱、夏の夜はホタルが舞い、用水路では大粒のシジミが必要なだけ採れた。夏には近くを流れる小川が水泳場となり、魚つりの場でもあった。また、白鷺陵と呼ばれた仁徳天皇陵の営巣地から飛来するシラサギ（チュウサギ）が水田の中をゆっくりと歩く姿が常にあった。初秋の夕方に頭上高く飛ぶギンヤンマを輪ゴムと糸で出来た小道具で捕まえた時の興奮は今でも鮮明に思い出す。しかし、これらの生物は、高度経済成長時代の宅地化の進展などとともに、瞬く間に姿を消した。私の世代は農村の持つ豊かな自然を余すことなく享受した最後の世代なのかもしれない。

それから約半世紀を過ぎ、全国の各地で、絶滅寸前の様々な生き物が復活しつつあるとの報道を見かけることが多くなってきた。

現在、横浜市の南に住むが、ここに川幅 10 メートル程度の阿久和川が、散在する水田や畑地と住宅地の中を流れている。この川は、10 数年前に転居した時から相当数のコイが泳いでいた。最近になり、横浜市の努力が実を結び、水質の改善が著しい。親水施設が設けられて、夏には子供たちが川に入る姿も見られる。この川で、近頃、野生のマガモの親子連れをよく見かけるようになってきた。チュウサギがじっと獲物をもとめてたたずむ姿もたまに見かけるようになった。さらに、川沿いに数キロ下った横浜新道料金所のすぐ傍の、マンション、倉庫、工場や一般住宅に囲まれ孤立して残された林の中に、わが国では最大のサギであるアオサギの営巣地がある。子育て期間中に営巣地に近づいてみたが、数十羽を超える親子がいた。これらの鳥は阿久和川や付近の水田などを利用しながら、都市的な環境にも順応し生息数を増やしているように思われる。

昨年 9 月 24 日に、兵庫県豊岡市の兵庫県立コウノトリの郷公園では、世界で初めて、人工増殖したコウノトリの野外放鳥試験を開始して、日本国中を沸かせた。放鳥された 5 羽のコウノトリは大変な人気者で、明け方の月を背景に大空を舞う合成写真が虚偽報道される騒ぎまでであった。行動範囲の広い、また生態系の上位に位置する肉食性の大型鳥類が、生息するためには、水、土壌、大気、生態系など自然環境が広範囲で適切に維持され、ドジョウやフナ、バッタなどの餌となる生物が河川や水田に一定の密度で生息する必要がある。

ろう。このためには、河川などの水質管理、残留性の高い農薬などの化学物質の管理などの法制度が整備され、また、下水道の普及、河川や農業用水利施設が環境に配慮した構造であるなど、社会全体がハード、ソフトの両面で環境を保全するために高度に組織化されている必要があろう。加えて、地域社会の積極的な協力が必要である。豊岡では公園の周辺で、農家が減農薬・無農薬栽培に取り組んだり、コウノトリが電線に衝突しないように電力会社が協力して、電線を地中化したり移設したりする工事や、高圧線に鳥の目印となる蛍光のオレンジや黄色のプラスチック製カラーリングが取り付けられたと報道されている。すなわち、農業のみならず環境政策にかかわるすべての関係者の努力、住民、企業など地域社会の理解と支援や、規制措置を含む制度・政策が整備されるなど、文化・社会が成熟して初めて達成が可能な事業であらう。

さらに、強調しておきたいことがある。この鳥の繁殖地シベリアのアムール川中流域には広大な低湿地が存在し、一つがい当たりのテリトリーは500ヘクタールを超えるという。日本にその様に広大な低湿地はない、水田がそれに変わるものであろう。この鳥が真に野外に復帰するためには、かつてそうであった様に、水田農業との共存が必須であらう。米国においても、絶滅に瀕したカリフォルニアコンドルの人工増殖・野外復帰計画が進められている。しかし、この鳥は動物の死骸など腐肉を餌にし、手付かずの自然の中で生息する。コウノトリの野外復帰計画は、人間社会との共存を目指すもので、現代社会においてより一層重要な意味合いを持つものと考えられる。

農業環境政策としてヨーロッパで始められた、自然環境の保全に貢献する農家の活動を、経済的に支援する環境直接支払い制度が、滋賀県と福岡県で実施されている。特に、福岡県の制度は生物多様性の保全を目指したものである。

さらに重要な動きは、10月27日の「経営所得安定対策等大綱」の決定である。これまで全農家を対象に講じられてきた価格政策を、担い手に対象を絞った所得政策へ転換し、品目横断的経営安定対策を創設する。さらに、これと表裏一体の関係にある、米の生産調整支援対策を見直す。同時に、農地・水などの資源や環境の保全向上を図るための対策を創設するという内容である。将来にわたり安定的に食料を供給するためのシステムを構築することと、同時に国土・自然環境の保全、良好な景観の形成、文化の伝承などを支える社会環境と自然環境を、持続的に保全していく仕組みを構築しようとするものである。

この様な新しい農業政策は、環境改善に向かう社会全体、特に農業地域における環境の保全、中でも生物多様性の保全を始めとした自然環境の保全対策を飛躍的に推し進める原動力となるであらう。

コウノトリの復活が、農業とりわけ水田農業との共存の結果であることは、農業とは無縁の都市住民にも、農業に対する感覚的な共感を呼ぶ。農業の多面的機能、中でも生物多様性保全機能発揮の象徴として、コウノトリなど水田に生息の場を持つ鳥類の復活は、その優雅な姿と飛翔により人々に感動を与え、農業への理解者を増やし、ひいては国内外で農政全体の推進に大きな力を与えてくれるに違いない。